

7

薬・穴・脈からなる初学医書の比較検討

—16世紀における医学伝授の書誌的考察—

松木 宣嘉

四国医療専門学校 鍼灸マッサージ・鍼灸学科

16世紀における日本の医学は、曲直瀬流の勃興とそれに伴う医学教育の発展があるが、曲直瀬流が盛んになる前後、それとは異なる初学用と思われる医書が存在する。一つは度会常光による『管蠡草灸診抄』（1546年序）であり、外題のとおり本草・経穴・切脈について書かれた医書である。二つめは著婆國任による「家伝心牛」を冠する古医書であり、『家伝心牛明堂針治之要略』（1580年序）『家伝心牛脉治秘決』（1572年序）、『家伝心牛本草要略』（1619年写）の三種がある。三つめの『明医和集』（著者・成立年不詳）は成立が定かではないが、「家伝心牛」と同様に『著婆五臟経』由来の図法師が記載されていることから同時期の書であることが推測される。以上の三冊はいずれも薬・穴・脈の三種について書かれているという類似した内容を持っていることから、これらの比較検討をおこなうことで16世紀における医学伝授の書誌的考察が可能であろうと考えた。各書の構成であるが、まず『管蠡草灸診抄』は「本草主治目録」「灸腧穴目録」「診切脉法目録」と薬・穴・脈の順に書かれている。次に「家伝心牛」であるが、これは各々別の医書となっている。最後に『明医和集』は「薬性之論」「診候大意之脉書」が書かれ、最後に図法師と腧穴が記載されるため薬・脈・穴の順に書かれている。薬に関する内容は、『管蠡草灸診抄』では病門ごとに使用生薬が記され、その後薬種分類ごとに生薬が記載される。『家伝心牛本草要略』ではまず百三拾七味の生薬について解説がなされ、その後生薬使用に関する解説が書かれている。『明医和集』では薬種分類ごとに生薬が記載され、その後使用に関する解説が書かれる。穴に関する内容は『管蠡草灸診抄』では身体部位ごとに経穴解説がなされ、「灸腧穴」とあるため灸での使用を目的として書かれたように思われるが、鍼の深さと壮数が併記されている。また、本書には『著婆五臟経』由来の特徴的な穴名は用いられておらず、図法師も描かれていない。次に『家伝心牛明堂針治之要略』には身体部位ごとに図が描かれ、その後経穴解説がなされている。また『著婆五臟経』由来の穴名も一部用いられ、使用方法は鍼の深さのみ記載されている。『明医和集』は仰人図、伏人図、中風図が描かれ、図に続いて経穴解説がなされている。「家伝心牛」同様に著婆五臟経由来の穴名が一部用いられており、使用方法は灸の壮数のみが記載されている。脈に関する内容は、『管蠡草灸診抄』では脈状について七表八裏九道が解説され、『察病指南』などに見られる脈状図が描かれている。『家伝心牛脉治秘決』では表裏・虚実・寒熱の弁別を主眼に脈状が解説されている。『明医和集』には七表八裏九道についても書かれているが、浮沈遅数の四脈を強調し、表裏・寒熱の弁別に用いている。以上の比較からこれら三冊は、内容の軽重はあれども薬・脈・穴の項目ごとに書かれた内容が非常に類似している。これは16世紀の初学教育に求められた内容であることが考えられる。また、『管蠡草灸診抄』の著者である度会常光は伊勢神宮の神領内で生まれた神宮医方の人物であることから、官医に近い立場であったと思われる。また「家伝心牛」の著者である著婆國任は足利義栄に出仕していた人物であるが、永禄十二年（1569年）に殺人を犯して出奔したことが明らかになっており、著婆姓を名乗る最も古い記録は『家伝心牛脉治秘決』の奥書であることから俗医の立場であったと思われる。そのため『管蠡草灸診抄』には正統な中国医学書である『察病指南』の脈状図が引用され、また俗的な『著婆五臟経』由来の経穴名が記載されなかったことが推測され、官医と俗医の違いが現れていると考えられる。